

立教大学チャプレン団 平和メッセージ

『敗戦 80 年を迎えて』

「平和を造る人々は、幸いである その人たちは神の子と呼ばれる。」

(マタイによる福音書 5 章 9 節)

立教大学にあって、平和を願うすべての人びとへ

今年は、1945 年 8 月、日本が日中戦争、太平洋戦争を含む、世界大戦での敗戦を認め、ポツダム宣言と呼ばれる無条件降伏勧告を受け入れてから 80 年目を迎えます。しかし 80 年が経てもなお、イスラエルによるパレスチナ自治区ガザ地区への空爆、ミャンマー軍事独裁政権によるミャンマー国内での圧政、ロシアとウクライナの戦争、イスラエルとイランの紛争、加えてアメリカによる介入など、世界規模での戦争の予兆を感じさせる出来事がここ数年、立て続けに起きています。また大国、強国と称される国々でナショナリズムが興隆し、大規模な移民排斥、さらに利己的な経済活動は、深刻な貧困や環境問題を引き起こしています。

日本国内においても、80 年前の沖縄戦で多くの沖縄住民が大日本帝国軍の兵士によって殺された(沖縄住民が軍による統制によって精神的に追い込まれて自死したことを含めて)という事実を認めようとしなない国会議員がいることも明るみに出ました。また「台湾有事」を前提として奄美・石垣・宮古での軍備拡張が進んでいます。それらの現況が示していることは、わたしたちの生活上の安全が今、極めて危うい状況にあるという現実です。

敗戦の翌年 1946 年に公布された日本国憲法は、戦争という悲慘と痛みを知った人びとの、もう二度と、戦禍を繰り返すまい、との悔いと、子どもたちに平和を手渡そう、との決意の連続線上にあります。この憲法に謳われた、戦争放棄、基本的人権の尊重は、神の似姿として創られた人間の尊厳を守ることに奉仕するキリスト者のみならず、平和を願うすべての人びとの切なる願いであり、戦争の終結から 80 年経った今も、決して手放してはならない希望であり続けています。

今年創立 151 周年を迎える、わたしたちの立教大学にとっての戦後は、つねに平和の構築に寄与する学問探究の歩みであったと言えます。それは、本学がアジア・太平洋戦争の最中、学生たちを戦地に送り出した、という深い痛みの反省に立ってきたからです。立教大学は、自由の学府であると同時に平和の学府です。社会正義と世界平和に貢献する人を育成すること、それも、わたしたち立教大学の教育的使命と考えます。

今、わたしたちにできることは、無関心を戒め、隣人への愛に生きるとの、キリストの教えに聴き、そして、連帯と信頼をもって平和と相互理解のための努力を惜しまないことです。敗戦から 80 年目を迎える今年、正義と平和を希求しながら、日々、立教大学の教育活動を支え、守ってくださる皆さんと、改めて、真の平和への決意を共にしたいと思います。

立教大学チャプレン団